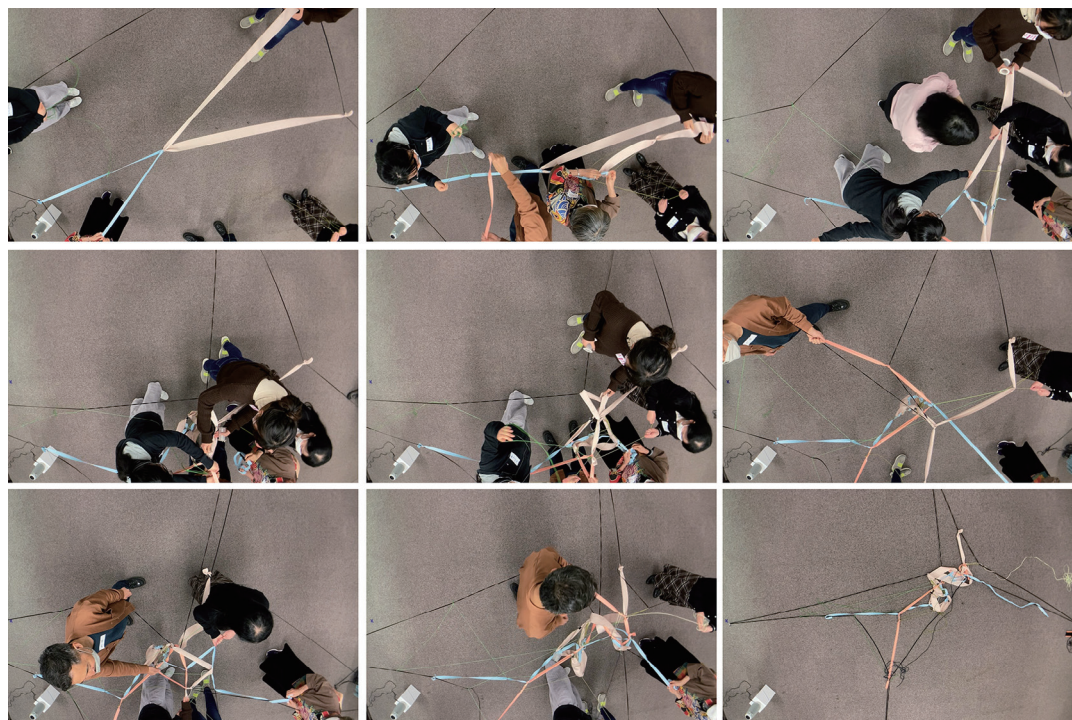




人間模様を編む

2021-2022 (進行中)

ワークショップ

長さ: 各 60-90 分

プロジェクト『追熟と訛り』の一部 / 神戸大学国際文化科学研究科との共同研究として

神戸大学国際文化科学研究科による多様性受容に関する研究に呼応するように、対話と協働のワークショップを行い、多様な人々との社会構築を体験することを試みた。そこでは、外国人、障がい者といった明らかな違いを持つ人々を道具化する傾向への異議として、わかりやすい多様性ではない「他者との違い」への気づきを求め、あらゆる人に備わっているマイノリティ性を引き出すことを焦点に。現在、ワークショップからの展開に取り組んでいる。

ワークショップの社会模様

「人間模様」という言い回しは、社会をさまざまなひとの複雑な関係、交叉するものとして描写している。各ワークショップグループは、以下で構成された: i) お互いに面識のない5-6人の一般市民で、その輪の中で言葉を交わし、紐を使って編んでいく「対談者」、ii) 4人の研究者で、会場に立ち合い、対談者たちを物理的に支援する「受動的参加者」、iii) アーティストが務める「モデレータ」。モデレータは遠隔で参加し、姿を見せずにその存在を声だけに減らすことで、参加者間の相互関係に重点を置いた。

各対談者には、本名ではなく自ら選択したニックネーム(例: キキキ、コバエ)を用い、一般的な社会的分類要素(例: 年齢、職業、住所など)に言及することなく、自分の内面的なことなどを伝えて自己紹介するようお願いした。

フィルタを削除 - マイノリティとしてのあなた

あなたが「マイノリティ」、「少数派」となることは何ですか? あなたの体験、逸話などをまじえて話してください。モデレータによるこの質問で対話は始まる。ワークショップ前に、研究のテーマと意図、およびこの質問は対談者に知らせず、先入観を与えないよう配慮。また、この質問や「マイノリティ」という言葉をさまざまな形に言い換え、その意味が否定的なものやステレオタイプに限定されるのを避け、対談者それぞれにとっての「マイノリティ」への個人的な入り口を示唆。対談者はそれぞれ自身のアイデンティティを前向きに省み、多くが「じつは」という告白のこぼれから話を始めた。

基本的には対談者の会話の自然な流れを尊重。会話が停止した時や何も行動が起こらなかった折には、モデレータが対談者の逸話や行動を拾い上げ、新しい流れの方向を示すことによって対話や協働をサポートした。

共感、関係、反対のために編む

対談者はそれぞれの紐を持ち、その色、幅、弾力性は、自己定義されたアイデンティティ(忠実/柔軟、内向/外向)を反映。「社会の枠」という、4人の研究者が四隅を手にした黒い紐の輪で区切った、ワークショップフィールドに足を踏み入れた。対談者はそれぞれの紐を「社会の枠」につなげてから、対話を開始。

対談者は対話を反映するために紐を使用し、意見/感情を提示(結んで共感を示す、交叉させて親しみを伝える、引き離して反対を表すなど)。研究者を含む会場にいる全員は紐でつながっており、その振動や伸張はうなずきなどの音にならない表現も含めた参加者間の全方向のやりとりを身体的にも伝え、共有させた。

お互いを知らずに集まった彼らは、普段とは異なる環境で突如として深遠な問いに直面し、日常の関係では避けていたはずの対立を恐れず、ゆっくりと自分の内面を打ち明け、お互いに距離を詰め、関係性を築いていった。



(左ページ) ワークショップ午前の部を俯瞰撮影したシーケンス(右ページ、上) ワークショップ午後の部で参加者が対話をしながら手にした紐を編んでいる様子(右ページ、下) 360度を捉えるウェブ会議用カメラを通してのワークショップの様子; ワークショップでの対話と協働の結果として残された、絡み合う紐

